

なり、隔世の感がある。しかし、ドイツ医学の恩恵は、あちこちにたくさん残っている。

ベルツの日記：長い日本の滞在期間に、ベルツ博士は日記や手紙に日本のことをあれこれと書き残している。年譜によると昭和14年（1939年）『ベルツの日記』が浜辺昌彦訳で出版されている。通常、私たちが目にして読むのは岩波文庫版であり、私もずいぶん昔に通読した記憶がある。岩波文庫版は「トク・ベルツ編・菅沼竜太郎訳」での出版であるが、品切れ・再版未定で入手は難しい。トク・ベルツは明治22年（1889年）に日本で生まれたベルツ博士の長男である。日本の滞在期間が長いうえに、宮内庁御用掛侍医局顧問として明治天皇と皇太子の健康管理に従事したりしているから、皇室に触れる記述もある。さらに明治政府の高官とも面識があり、日記の記述は多岐に渡る。一言で言えば、当時の西洋人から見た明治初期の日本の様子を記しているのである。優しい視線も厳しい視線もあるが、「何よりも我々をうつのは、日本を愛してやまなかったベルツその人の姿である」とベルツの日記を解説した酒井シヅ氏は述べている。

以下はベルツ博士の至言である。

●日本国民は、10年にもならぬ前まで封建制度や教会・僧院・同業組合などの組織を持つ我々の中世騎士時代の文化状態にあったのが、一気に我々ヨーロッパの文化発展に要した500年あまりの期間を飛び越えて、19世紀の全ての成果を即座に自分のものにしようとしている。（漱石の1908年出版の小説『三

四郎』には、「明治の思想は、西洋の歴史に現れた300年の活動を40年で繰り返している」という下りがあるが、心ある日本人は急速な西洋文化の受け入れに辟易し危惧の念を持っていたのだと思う）

●日本ではいまの科学の成果のみを彼等（お雇い教師）から受け取ろうとしている。……この成果をもたらした精神を学ぼうとしない。（耳の痛い苦言である。物まねは上手いが創造性に欠けると評されるわが同胞を、よく観察したベルツ博士である）

●欧州の学問世界は機械ではなく、一つの有機体である。あらゆる有機体と同様に花を咲かせるためには、一定の気候と一定の風土を必要とする。日本人はお雇い外国人を学問という果実の切り売り人として扱ったが、彼等は学問という樹木を育てる庭師としての使命感に燃えていたのだ。（前文と同趣旨であるが、分かりやすい比喻であり、考えさせられ頭が痛む。分に応じ才に準じての仕事しか私どもはできないのだが、ノーベル賞を取るほどの創造性とは言わぬまでも、どの仕事にも何かしらの工夫の要素は残っているのだと思う。この小さな工夫がわれわれごく普通の市井人で試される創造力なのであろう）

現在、ごく普通の市井の人々が、世界中を駆け巡っている。9世紀初めに唐へ渡って仏教を学んだ最澄や空海からは10世紀を経てはいるが、明治の初頭、ドイツから日本へ来てくれたベルツの勇気に脱帽するのである。

お知らせ

北海道航空医療ネットワーク研究会「研究運航実績報告書」について

◇救急医療部◇

この度、北海道航空医療ネットワーク研究会〔通称：HAMN（ハミン）〕では、新たな北海道地域医療再生計画の中で平成23年度から3ヵ年事業として実施した「医療優先固定翼機（メディカルウィング）研究運航事業」の実績報告書を作成しました。同研究会のホームページにその内容が公開されましたので、是非とも閲覧いただきたくご案内申し上げます。

北海道航空医療ネットワーク研究会

ホームページURL：<http://www.hokkaido.med.or.jp/hamn/>